

対人関係とインターネット上での問題行動¹

－ 高校生のインターネット上での問題行動に関連する要因の基礎的検討Ⅲ－

Close Relationships and Problem Behavior on the Internet among Japanese High School Students

西 村 洋 一

Abstract

The aim of this study was to clarify how problem behavior on the Internet by Japanese high school students was related to their close relationships. We employed both cross-sectional and longitudinal data to examine this research question. Surveys were conducted twice : 593 Japanese high school students were initially asked to complete a questionnaire, and then 192 of them participated in a follow-up survey about four months later. Feelings about friends had a significant relationship with problem behavior on the Internet in both the cross-sectional and longitudinal analyses. Parental attachment and perceived parental controls on Internet use also affected their problem behavior in the longitudinal analysis. These results revealed how the Internet use of Japanese adolescents is related to their close relationships, and suggested a potential avenue for intervening in their problem behavior on the Internet.

キーワード：ハラスメント (online harassment) / ネットいじめ (cyberbullying) /
インターネット上の性的情報 (Internet pornography) /
インターネット上のプライバシー (online privacy)

1. 問題

1.1. インターネット上での問題行動

インターネット上では、オフラインの世界と同じく様々な人と人の関わり、コミュニケーション、対人行動といったものが観察される。そして、その中には問題とされるものも含まれる。そのため、インターネット上での問題行動を理解することは、インターネットが私達にもたらす影響をとらえるための1つの資料となる。また、日本においてもインターネットが本格的に普及してから20年ほどとなるが、その中で老若男女を問わずインターネットを誰もが利用するようになってきた。その中であって、あえて若者に焦点をあて、そのインターネット上での問題行動を検討することは、イン

ターネット利用のもたらす影響の理解とともに、発達の観点やより大きな被害への予防・介入といった観点からも有用な知見になると思われる。

そのような視点からの検討として、西村・遠藤(2016, 2017)では、高校生を対象に調査を実施している。ハラスメントやネットいじめにつながるような行為、出会い系サイトの利用、権利のないソフトウェアなどのダウンロードなど様々なインターネット上での問題行動²を取り上げ、特に利用者特性に焦点をあてた検討を行ってきた。西村・遠藤(2016)では、パーソナリティやインターネット利用動機、そして行動基準といった変数を用いて問題行動との関連を検討した。そこでは、誠実性や他者への配慮を行動の基準とおくことが、比較的多くの問題行動と負の関連を示した。西村・遠藤(2017)においては、自己制御および疎外感といった変数を取り上げ検討した。自己を抑制

NISHIMURA, Youichi

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
社会心理学Ⅰ・Ⅱ

する制御の高いものは、他者への嫌がらせや攻撃といった問題行動を抑制するといった関連が見られた。これらの検討によりどのような利用者特性がインターネット上での問題行動と関わるのかという知見がもたらされている。

しかし、利用者特性についての知見のみでは、予防や介入という点においては具体的な方策へはつながりにくい部分がある。その意味においては、利用者特性のような個人要因だけではなく、状況要因や社会文化的要因といった点にも目を向ける必要があるであろう。本研究では、高校生を対象にその親密な対人関係（あるいはその認知）に着目する。インターネット上での問題行動と対人関係との関連が示されるのであれば、親密な他者との関係の有り様から問題行動を予見したり、関係性のあり方へ介入することで問題行動の予防へとつながることも考えられるためである。

他者の存在が行動に影響を与えることは社会心理学をはじめ多くで明らかにされていることである。その他者が親や友人などの親密な他者である場合、問題行動などの重大な結果をもたらす行為に強く関わってくるのが考えられる。特に若者においては、発達の観点からもその影響の大きさは考えられるであろう。例えば、親との関係や友人関係が個人の成長や人生、人間関係や社会生活などに影響を及ぼすことが指摘されている（遠藤，2015；数井・遠藤，2005；松井，1990）。それゆえ、若者による問題行動と親密な他者との関わりについても多くの検討がなされてきている。

1.2. 親密な対人関係と問題行動との関連

日本における親や友人との関係と問題行動や学校適応との関連を検討したものとして、酒井・菅原・眞榮城・北村（2002）がある。長年にわたり親子を追跡した大規模な調査であるが、15年目の時点での結果をもとに親と子の相互の信頼感、親友との信頼感と学校での適応状況との関連を分析している。それぞれの信頼感を説明変数とし学校適応を目的変数とした重回帰分析の結果からは、子が母親に抱く信頼感は反社会的傾向³に負の関連を示したのに対し、親友との信頼感は正の関連が見られた。また、母親との間で相互不信の群の場合、親友との信頼感が高いと反社会的傾向が高

いという組み合わせの効果も得られている。

高木・山本・速水（2006）では、高校生を対象に、校則違反で受けた指導回数を問題行動の指標として、教師、親、および友人との関係を取り上げ、両者の関連を検討している。結果として、ファッションの違反については女子生徒の母親との関係や友人関係が良い場合に指導回数が多いという関連が見られた。反抗・暴力や逸脱行為といった問題行動も友人関係との関係が良いことで指導の数も多いということが示された。

中学生の出会い系サイトの利用を含めた非行傾向行為⁴と親や友人との関係の関連を調べた研究では、非行傾向の見られない群に対し、従来型の非行や出会い系サイトの利用の経験のある群は父親、母親との関係についてあまり親密でなく、親からの監督も多くないという結果が得られている。友人関係の親密さの関連は見られなかったが、出会い系サイト利用を含めた非行傾向を示す青年は友人と群れる形でつきあう傾向が高いことも示された（小保方・無藤，2007）。

欧米など日本以外の国々では親や友人と問題行動との関連が多く検討されている⁵。その際、理論モデルとしては、幼い頃の親の統制やモニタリングが貧しいことで友人関係がうまくいかず、逸脱の見られる友人・仲間との付き合いにより非行や問題行動へとつながるといったものが提案されている（例えば、Patterson, DeBaryshe, & Ramsey, 1989）。その中で、親から子への関わりとしてモニタリングと子の問題行動との間の関連を見出す研究は多い（例えば、Fletcher, Steinberg, & Williams-Wheeler, 2004；Laird, Pettit, Bates, & Dodge, 2003；Steinberg, Fletcher, Darling, 1994）。また、アタッチメント理論で示されるような親から子へのサポートが多くなされることは、自尊感情が高いことと関連し、サポートの少なさは問題行動へとつながる（Parker & Benson, 2004）。さらに、Patterson et al.(1989)の示すようなモデルをもとに、問題行動の見られる友人との付き合いなどが、青年の問題行動に正の影響を及ぼすことが縦断的調査により示されている（Ary, Duncan, Duncan, & Hops, 1999；Ary, Duncan, Biglan, Metzler, Noell, & Smolkowski, 1999）。そして、青年の友人関係と親の関わり（モニタリング）には交互作用が見ら

れ、逸脱した友人との付き合いがあったとしても、親の関わりが多く見られる場合には、問題行動の増加は見られないという関係も見出されている (Galambos, Barker, & Almeida, 2003)。

1.3. インターネット上での問題行動と対人関係との関連

青年の問題行動と親や友人・仲間との関係についての知見は多くあるが、インターネット上での問題行動との関連はどのようになっているのか。Ybarra & Mitchell (2004a, 2004b) は、1999年から2000年にかけて10から17歳の代表性の高いサンプルを対象に調査を行った。ここでは、いじめ行為と関連するインターネット上での攻撃的な行為をハラスメント行為とし、その経験の有無とオフラインでの問題行動や親との関係、そしてインターネットの利用状況などとの関連を調べた。加害のみ、あるいは加害と被害の両方の群は、被害のみを受けた群やハラスメントに関わっていない群に比べて親のモニタリングや親との情緒的な結びつきが不足している傾向が見られた。友人関係についてはオフラインでのいじめの被害を受けた経験がインターネット上でのハラスメント行為につながっている可能性が示唆されている。また、オフラインでの問題行動や学校へのコミットメントの低さ、アルコールの摂取の多さ、そしてインターネットの利用の多さ（例えば、週あたりの利用日数など）にもつながるという結果も示された。ここでは親によるインターネット利用の統制については群間での差は見られていない。さらに、およそ5年後に行われた同様の調査 (Ybarra & Mitchell, 2007) においても同様の結果が得られており、親との葛藤の水準が高いことやいじめの被害を受けた経験はハラスメント行為との間の関連を示した。また、元々攻撃的な行為やルールを破る行為をするものはインターネット上でのハラスメント行為を多くするという関連も示されている。そして、Hinduja & Patchin (2008) ではネットいじめの被害と加害の両方の経験と関わる要因を検討しているが、学校における問題行動や薬物の摂取とともに、仲間との喧嘩やオフラインでのいじめの被害・加害経験がネットいじめの加害行為と正の関連を示すことが明らかにされた。

本研究では、出会い系サイトの利用やインターネット上での性的情報への接触も問題行動として含めている。インターネットは性的情報への接触の機会を増大させており、青少年への影響については懸念も大きい。性的情報への接触と利用者特性などとの関連を検討した研究では、ルールを破る行為などを行うものが意図的に性的情報に接触するといった知見とともに、友人などからの被害やネットいじめの被害経験のあるものや親のモニタリングの不十分さ、そして情緒的結びつきの少なさといった要因が正の関連を示している。ただし、ルール作りや履歴のチェックなどの親の統制は意図的な性的情報への接触との間に有意な関連は見られなかった (Wolak, Mitchell, & Finkelhor, 2007; Ybarra, & Mitchell, 2005)。

日本における青年のインターネット上での問題行動と親や友人との関わりについての検討は多くはない。その中で、内海 (2010) は親の関わり、特に統制が及ぼす子の問題行動への影響についての議論を踏まえて、インターネット利用に対する統制実践、把握、接続の自由と分けて、中学生によるネットいじめの加害と被害との関連を検討した⁶。結果としては親の統制はインターネットいじめの加害・被害ともに直接の関連は見られず、インターネットの利用時間を通して関連を示すというものであった。安藤 (2009) においても中学生のいじめに関連する要因を検討しているが、親の関心がネットいじめの加害・被害の両方の経験群でネットいじめ経験なし群、被害群、加害群よりも低いという結果であった。

1.4. 本研究の目的および予測

本研究の目的は、青年の対人関係とインターネット上での問題行動との関連を検討することである。そして、本研究ではハラスメント行為や性的情報の接触といった問題行動を総合的に取り上げ、その関連を検討する。上述のとおり、青年の示す問題行動には親や友人といった親密な他者との対人関係のあり方が影響を及ぼしていることが示されており、本研究においても同様の有意な関連が見られることが予測される。このような検討は日本においては数が多くないこともあり、1つの有用な知見となることが期待される。

親に関しては、親の関わりとしての統制と情緒的な結びつき、特にアタッチメントに着目し問題行動との関連について検討を行う。統制については問題行動に影響するのは統制実践なのか把握であるのかといった議論が続いているため、内海(2010)と同様に両方を取り上げ、その関連について検討を行う。従来の問題行動との関連を検討した研究結果を踏まえれば、インターネット上における問題行動との間には負の関連が見られることが予測される。アタッチメントについては、先行研究ではオンライン、オフラインのどちらの問題行動にもその関連が見られている。特にアタッチメントの不安は、対人関係の中での自己に対する自信が低さを表しており、問題行動の多さとつながることが予測される。他者の利用可能性や支援などの期待が低いアタッチメントの回避については明確な予測は難しいが、情緒的な結びつきの低さということであれば不安と同様の結果になるとも考えられる。

友人関係との関連については、本研究ではインターネット上の問題行動を幅広くとらえていることもあり、先行研究にあるような逸脱した友人との付き合いやいじめの被害経験といったことを取り上げず、普段関わっている友人へ抱いている感情という面から検討する。信頼・安定、不安・懸念、葛藤といった感情状態を取り上げるが、不安・懸念や葛藤といった感情は上述の先行研究よりインターネット上の問題行動にも正の関連を示すと予測される。信頼・安定については予測が難しい。酒井他(2002)の結果にあるように高い信頼を感じる事が問題行動の多さにつながる可能性もある。一方では、問題行動、特にハラスメントのような行為は、友人からの被害などその関係の不安定さがもたらすと考えられる。そのため、友人へ信頼・安定を強く感じることは、問題行動を抑制するように働くことも考えられる。

本研究の特色は縦断的調査により検討を行うことである。西村・遠藤(2016, 2017)ではいずれも横断的調査から分析を行い、議論しているため、縦断的調査で検討することの必要性が挙げられていた。これまでの検討も踏まえるために、横断的な調査および分析(1回目の調査)についても報告を行うことで、連続性を保つとともに、縦断的

調査の結果も取り入れて因果的な観点についても一段深く検討を行っていく。

2. 方法

2.1. 調査対象

1回目の調査(以下、Time 1とする)は15歳から18歳の高校生(高専生)の男女618名より回答を得た。調査の実施はインターネット調査会社に委託したため、そのモニターが対象となった。インターネットの利用状況として尋ねた一日あたりのインターネット利用時間の分布を確認したところ、極端な値を示す回答が見られたため、平均利用時間から3標準偏差より上の値を報告した回答者を分析から削除した。そのため、分析には593名(男性303名、女性290名)のデータを用いた。平均年齢は16.84歳(SD=0.92)であった。

2回目の調査(以下、Time 2とする)は1回目の調査対象者に対し調査への参加を依頼し、206名より回答を得た。その内、1回目の調査と同じ基準でインターネット利用時間の回答を検討し、192名分(男性109名、女性83名)のデータを分析に使用することとした。平均年齢は16.80歳(SD=0.92)であった。

2.2. 調査実施日

1回目の調査は2010年12月21, 22日に実施し、2回目の調査は2011年4月13, 14日に実施された。

2.3. 調査内容

インターネット上での問題行動 インターネット上における逸脱行動を取り上げ、過去3か月においてその経験の頻度について尋ねた。インターネット上でのいじめに関する行動を中心に攻撃的行動、だまし行動、ポルノグラフィなど性的情報への接触や違法なファイルの入手などを尋ねた。西村(2016, 2017)で使用したものと同様であるが、Wells& Mitchell(2008)による性的・身体的虐待などを受けている青年のインターネット利用行動を調べた研究を参考に個人情報扱いや性的な内容を含む他者との会話を問う3項目を追加した。そのため、全部で18項目となっている。項目の中には、質問項目の表現だけでは必ずしも問題であると言い切れないものもあるが、利用者を害

する結果をもたらす可能性のある行動を広く取り上げるという意図から含めることにした。また、西村・遠藤（2016, 2017）においては経験の有無を2件法で回答を求めていたが、本研究ではその頻度について5件法で回答するよう変更を行った。

ネット統制尺度 内海（2010）により作成された尺度であり、15項目を5件法で尋ねた。内海（2010）においては父親、母親と別に尋ねているが本調査では分けずに尋ねた。「統制実践認知」、「パソコンの使用の把握認知」、「接続自由認知」、「ケータイ電話使用の把握認知」の4つの因子が得られている。統制実践認知は、インターネット仕様に関する具体的ルール設定の有無や守らなかった場合の叱責等の認知であり、パソコン・携帯電話の把握認知は使用状況を親がどれだけ知っているかの認知、接続自由認知は親がインターネットに自由にアクセスさせてくれるという認知を表す（内海, 2010）。

親への愛着尺度 丹羽（2005）により作成された尺度であり、17項目を5件法で尋ねた。「愛着不安」、「愛着回避」の2因子が得られている。愛着不安とは、必要とする時に親から助けや受容が得られるかについて不安を持つことであり、愛着回避とは、助けを必要とする時でも親に頼ることや近接することを回避することである（丹羽, 2005）。

友人に対する感情的側面尺度 榎本（1999）により作成された尺度であり、青年の友人関係における内面的な感情的側面をとらえるために作成された尺度である。全5因子のうち以下の3因子（「信頼・安定」、「不安・懸念」、「葛藤」）から一部の項目だけを使用した。全14項目について6件法で尋ねた。

インターネット利用状況 携帯電話およびPCの1日あたりの利用時間、それぞれでのインターネット利用経験年数を尋ねた。

デモグラフィック変数 性別、年齢、居住地域について尋ねた。

2.4. 倫理的配慮

調査内容には社会的に望ましくないことを尋ねる項目も含まれていることから、調査のはじめに示した教示文において、回答は強制されないこと、回答を中止することはいつでも可能であるという文言を含めた。

3. 結果

3.1. 分析1 横断データについての分析

3.1.1. 調査対象のインターネット利用状況

調査対象である高校生の携帯電話、PCの利用歴、インターネット（携帯電話とPC）の利用状況として1日あたりの時間数について、平均値と標準偏差を男女別に算出し、Table 1にまとめた。PCによるインターネット利用時間が携帯電話による利用時間に比べ長い、過去の調査結果でも同様の結果が得られており、インターネット調査会社のオンラインモニターであることによる結果であることが考えられる。全体として、インターネットを積極的に利用している高校生が対象になっていることがうかがえる。

性差について t 検定により検討したところ、男性よりも女性の方が携帯電話もPCの利用歴も長く、携帯電話によるインターネット利用時間も長い、PCによるインターネット利用時間は男性の方が長いということが示された。

3.1.2. 問題行動についての因子分析

18のインターネット上での問題行動について過去3ヶ月での経験について回答を求めたが、すべての項目を用いて最小二乗法による因子分析を行った⁷。スクリープロット、MAP、平行分析の結果を参照し、2因子解か3因子解が妥当と考えら

Table 1 インターネット利用状況の平均値及び標準偏差

| インターネット利用状況 | 全体 | 男性 | 女性 | $t(df=591)$ |
|---------------------------|------------|------------|------------|-------------|
| 携帯電話利用歴 | 3.16(2.42) | 2.67(2.34) | 3.67(2.40) | 5.18*** |
| PC利用歴 | 6.48(2.80) | 6.12(2.96) | 6.86(2.58) | 3.21** |
| 携帯電話によるインターネット利用時間(1日あたり) | 1.47(1.61) | 1.20(1.44) | 1.76(1.73) | 4.31** |
| PCによるインターネット利用時間(1日あたり) | 3.36(2.26) | 3.75(2.43) | 2.95(2.00) | 4.35** |

注) () 内は標準偏差 全体 $n=593$, 男性 $n=303$, 女性 $n=290$ ** $p<.01$, *** $p<.001$

たが、最終的に解釈可能性も考慮して3因子解を採用した。プロマックス回転を施し、因子負荷量の低かった(.40未満)の項目を1項目(問題行動18)削除し、得られた最終結果をTable 2に示した。

3つの因子に高い負荷量を示した項目を見ていくと、第1因子は知り合いのなりすましや、攻撃的なメッセージの送付、うわさを流す、知人のメッセージをさらす行為など、知り合いなどの他者への攻撃やハラスメント行為の項目が集まっており、「ハラスメント行為」の因子と解釈された。第2因子は出会い系サイトの登録や利用、閲覧、未知の他者へ個人情報を送付するといった項目が

集まっており、「未知の他者への個人情報の暴露」の因子と命名した。第3因子は性的な情報への接触や違法での入手などの項目の負荷量が高いため、「性的な利用」の因子と解釈した。

各因子についてCronbachの α 係数を算出したところ、第1因子は $\alpha=.92$ 、第2因子が $\alpha=.83$ 、第3因子が $\alpha=.55$ であり、第3因子以外は高い数値を示した。

3.1.3. インターネット上での問題行動の頻度

インターネット上での問題行動の経験の有無について「まったく行ったことがない」と回答した人以外の回答をしたものを経験ありとしてそれぞれ

Table 2 インターネット上での問題行動の因子分析結果

| 項目 | Factor 1 | Factor 2 | Factor 3 | 共通性 |
|--|----------|----------|----------|-----|
| 13. 知人など自分以外の他者になりすまして、インターネット上で会話する | .88 | .02 | -.13 | .77 |
| 5. 悪口や暴言など相手を攻撃するような内容のメールを送る | .86 | .07 | -.08 | .80 |
| 11. 知人が自分だけに送ってきたメールを、本人に無断で他の人が見られるように転送する | .85 | -.09 | .00 | .63 |
| 9. インターネット上(電子掲示板やチャット、日記など)で、知人のうわさを流す | .84 | -.04 | .09 | .69 |
| 17. 知人が自分だけに送ってきたメールを、コピーして他の人が目にできる電子掲示板に貼り付ける | .76 | -.10 | .10 | .51 |
| 6. 人の目にふれたら嫌がりそうな知人の写真を他の人にメールで送る | .74 | .14 | -.08 | .68 |
| 16. 電子掲示板で悪口や暴言など他の利用者を攻撃するような書き込みを行う | .68 | .06 | .20 | .62 |
| 3. インターネット上(電子掲示板やチャット、日記など)で、知人の悪口を書く | .59 | -.08 | .19 | .36 |
| 1. 人の目に触れたら嫌がりそうな知人の写真を電子掲示板に投稿する | .53 | .36 | -.19 | .62 |
| 10. 他の人が所有するインターネット上の日記(ブログやソーシャル・ネットワーク・サイト)に対して、悪口や暴言など攻撃的なコメントを書き込む | .00 | .79 | -.03 | .61 |
| 8. インターネットで自分の写真を知らない人に送る | -.10 | .75 | .18 | .59 |
| 15. インターネットで自分の本名や住所などの個人情報を知らない人に送る | .06 | .59 | .01 | .40 |
| 7. 出会い系サイトを登録・利用する | .23 | .47 | -.01 | .43 |
| 14. 出会い系サイトを見る | .44 | .46 | -.01 | .69 |
| 4. インターネット上で出会った人と性的な内容の話をする | -.02 | -.03 | .61 | .35 |
| 2. インターネット上で性的な画像や動画などを見る | .08 | .03 | .45 | .24 |
| 12. インターネットを利用して、他の人が権利を持つファイル(音楽、動画、ソフトウェアなど)を違法に入手する | .02 | .33 | .43 | .42 |
| 因子間相関 | Factor 2 | .78 | - | |
| | Factor 3 | .47 | .56 | |

注) 省かれた項目「18. 性別など自分の情報を偽ってインターネット上で他者と接する」

れの行動について度数を集計し、Figure 1 に示した。性的な画像や動画への接触（48.4%）や権利のないファイルのダウンロード（28.0%）などが比較的多かった。男女での比較では、すべての項目で男子の方が多いという結果であった。性的情報への接触（問題行動 2，7，4）においてその差は特に顕著であった。ハラスメント行為に含ま

れる行動も総じて男性の割合がかなり大きかった。それに対し、「未知の他者への個人情報の暴露」の行動は女性も比較的多いことが示された。

問題行動の頻度について、本研究の結果とともに同様の調査を行ってきた3回（図に記載の年は調査時期）の結果をまとめたものがFigure 2である。全体に3年間でおおよそ同様の頻度となって

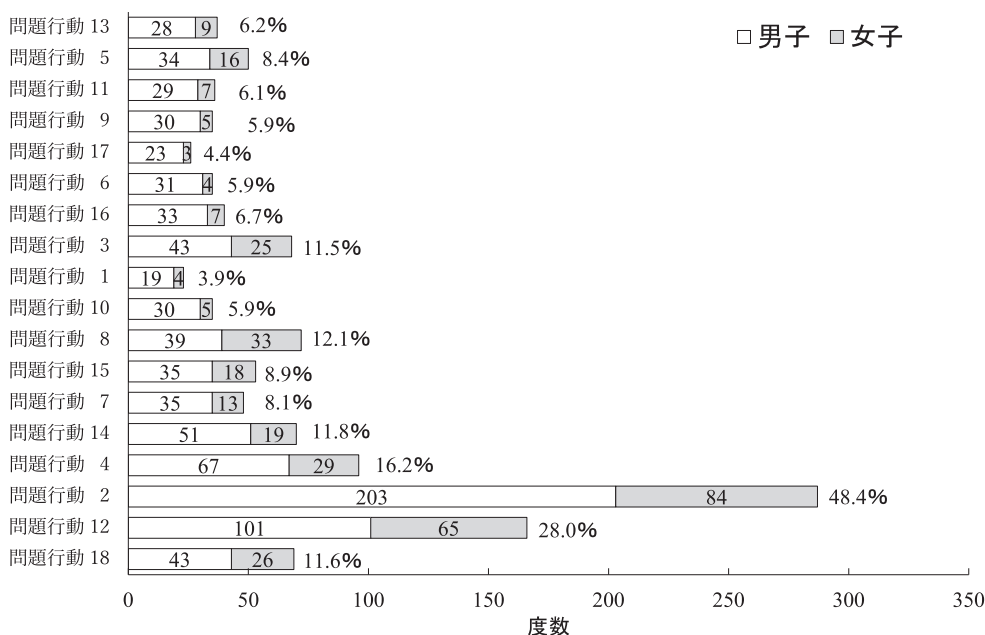


Figure 1 インターネット上での問題行動の生起頻度

注) 図内の数値は男女ごとの度数と全体における割合 (%) を示している。問題行動の記載順序は因子分析の結果に基づいて配置してある。

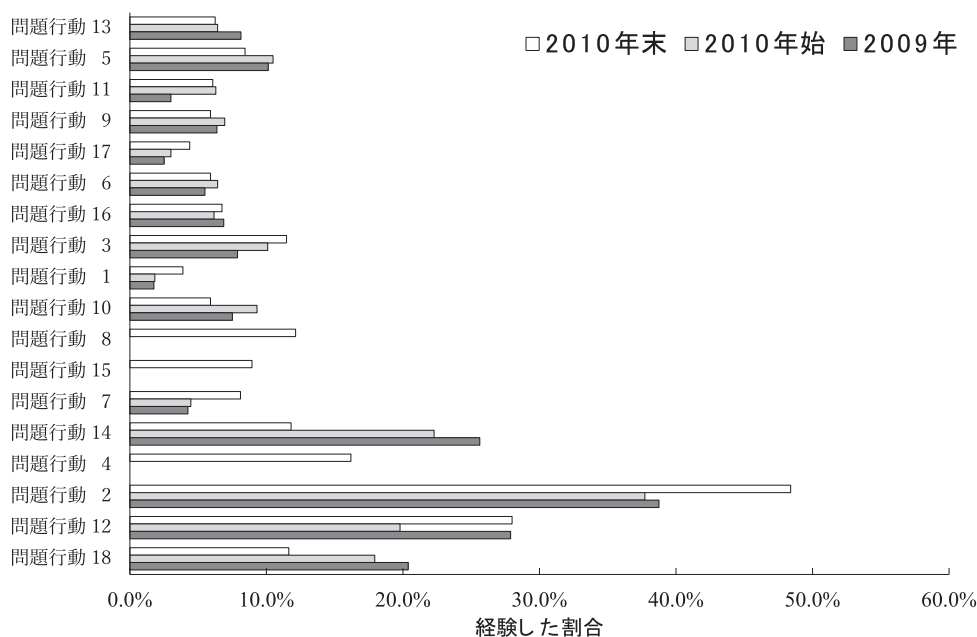


Figure 2 過去3回の調査のインターネット上での問題行動の生起頻度

Table 3 問題行動のカウントデータを目的変数とした回帰分析の結果 (n=593)

| 変数名 | 問題行動全体 | Factor 1 合計 | Factor 2 合計 | Factor 3 合計 |
|--------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 切片 | 1.73(0.4) | 0.39(0.78) | 0.10(0.56) | 0.60(0.23) |
| 性別 | -0.83**(0.14) | -1.18**(0.29) | -0.72**(0.2) | -0.64**(0.09) |
| 年齢 | — | — | — | — |
| 携帯利用歴 | — | — | — | — |
| PC利用歴 | — | — | — | — |
| 携帯利用時間 | 0.11**(0.03) | 0.21**(0.07) | 0.13**(0.05) | — |
| PC利用時間 | — | — | — | 0.07**(0.02) |
| 愛着不安 | — | — | — | — |
| 愛着回避 | — | — | — | — |
| 統制実践認知 | — | — | — | — |
| パソコン使用の把握認知 | — | — | — | -0.03*(0.01) |
| 接続自由認知 | — | — | — | — |
| ケータイ電話使用の把握認知 | — | — | — | — |
| 信頼・安定 | -0.04**(0.01) | -0.05*(0.02) | -0.06**(0.02) | -0.02**(0.01) |
| 不安・懸念 | — | — | — | 0.03**(0.01) |
| 葛藤 | 0.06**(0.02) | 0.09**(0.04) | 0.07**(0.03) | — |
| Nagelkerke の R^2 | 0.14 | 0.13 | 0.08 | 0.15 |

注) () 内は標準誤差 ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
 数値の入っていないセルはステップワイズ法により分析から除外された。

いるが、性的な画像や動画への接触(問題行動2)や出会い系サイトの登録・利用(問題行動7)が過去2回に比べ、本研究において増加がみられた。それに対し、出会い系サイトの閲覧(問題行動14)や自分の情報を偽った上での他者との接触(問題行動18)は過去2年に比べ少ない結果となっている。権利のないファイルのダウンロード(問題行動12)は2009年から2010年の1年間で減少が見られたが、そこから1年近く経ってまた2009年度と同水準となっていた。

3.1.4. 問題行動全体と因子ごとのカウントデータを目的変数とした回帰分析

問題行動の経験の有無について一度でも経験のあるものを経験ありとして各行動についてカウントした⁸。その際、18の問題行動全体の合計と因子分析の結果を踏まえた集計を行った。集計した結果のヒストグラムを作成し、分布を確認したところ、ポアソン回帰分析あるいはネガティブバイノミアル回帰が適当と判断された。過分散の検定の結果も踏まえて、問題行動全体、「ハラスメント行為」因子、「未知の他者への個人情報の暴露」因子の集計に対してはネガティブバイノミアル回帰分析、「性的な利用」因子の集計についてはポ

アソン回帰分析を実施した。説明変数は年齢、性別(ダミー変数)、携帯電話・PC利用歴(年)、1日あたりの携帯電話・PC利用時間、そして対人関係の変数(親への愛着、親によるネット統制、友人に対する感情)を投入した。なお、ステップワイズ法による変数選択も同時に行っている。結果をTable 3に示した。

分析の結果より、性別はすべてにおいて有意な負の関連があり、携帯利用時間は問題行動全体、「ハラスメント行為」因子、「未知の他者への個人情報暴露」因子で有意な正の関連を示した。対人関係の変数では、友人関係における信頼・安定の感情がすべての目的変数で有意な負の関連を示し、葛藤の感情が「性的な利用」因子以外で有意な負の関連を示した。親との愛着や親からのネット統制については第3因子でパソコン使用の把握認知が負の関連を示したのみで、その他の関連は見られなかった。

3.2. 分析2 縦断データについての分析

本研究では同じ調査対象に2回の調査を実施することで縦断データが得られている。そこでTime 2における問題行動の経験をカウントし、問題行動全体、そして各因子での集計結果を目的変数と

Table 4 縦断データによる Time 2 の問題行動のカウントデータを目的変数とした回帰分析の結果 (n=192)

| 変数名 | 問題行動全体 | 第 1 因子合計 | 第 2 因子合計 | 第 3 因子合計 |
|-----------------------------|---------------|---------------|--------------|--------------|
| 切片 | 0.42(0.57) | -0.40(1.54) | -1.99(0.34) | -0.95(0.31) |
| 問題行動 (Time 1) | 0.15**(0.03) | 0.48**(0.07) | 0.64**(0.15) | 0.58**(0.06) |
| 性別 | — | 1.32**(0.45) | — | — |
| 年齢 | — | — | — | — |
| 携帯利用歴 | 0.08**(0.03) | 0.14**(0.05) | 0.17**(0.06) | — |
| PC 利用歴 | — | — | — | — |
| 携帯利用時間 | — | — | — | — |
| PC 利用時間 | — | — | — | — |
| 愛着不安 | -0.05**(0.01) | -0.11**(0.03) | — | — |
| 愛着回避 | 0.04**(0.01) | 0.09**(0.03) | — | 0.02*(0.01) |
| 統制実践認知 | — | -0.08*(0.03) | — | — |
| パソコン使用の把握認知 | — | — | — | — |
| 接続自由認知 | -0.05*(0.02) | -0.23**(0.05) | — | — |
| ケータイ電話使用の把握認知 | — | — | — | — |
| 信頼・安定 | -0.04*(0.02) | -0.08*(0.03) | — | -0.02*(0.01) |
| 不安・懸念 | 0.05**(0.02) | 0.12**(0.03) | — | — |
| 葛藤 | — | — | — | — |
| Nagelkerke の R ² | 0.30 | 0.43 | 0.17 | 0.34 |

注) () 内は標準誤差 ***p*<.01, **p*<.05, +*p*<.10
数値の入っていないセルはステップワイズ法により分析から除外された。

し、Time 1 での問題行動の各集計を投入した上で、Time 1 における年齢、性別 (ダミー変数)、携帯電話・PC 利用歴 (年)、1 日あたりの携帯電話・PC 利用時間、そして対人関係の変数 (親への愛着、親によるネット統制、友人に対する感情) を投入した回帰分析を行った。分析 2 においてもステップワイズ法による変数選択を実施している。また、本分析でも分布状況および過分散の検定の結果を踏まえて、問題行動全体、「ハラスメント行為」因子、「未知の他者への個人情報の暴露」のカウントデータに対してはネガティブバイノミアル回帰、「性的な利用」因子の集計についてはポアソン回帰を実施した。結果は Table 4 に示されている。

回帰分析の結果より、対人関係の変数では親への愛着回避が問題行動全体、「ハラスメント行為」因子、および「性的な利用」因子において有意な正の影響が見られた。それに対し、親への愛着不安は問題行動全体や「ハラスメント行為」因子に有意な負の影響を示した。親によるネット統制については、「ハラスメント行為」因子に対する統制実践認知や接続自由認知の有意な負の影響が見られた。接続自由認知は問題行動全体でも有意な

負の影響を示している。友人関係の変数では、友人に対する信頼・安定の感情が問題行動全体、「ハラスメント行為」因子、「性的な利用」因子に対して負の影響を示した一方で、不安・懸念の感情については問題行動全体、および「ハラスメント行為」との間に正の影響が見られた。

4. 考察

4.1. インターネット上での問題行動について

本研究の目的、高校生によるインターネット上での問題行動と親密な対人関係との関連について横断的、縦断的調査から検討を行うことであった。まず、インターネット上での問題行動について高校生がどの程度経験しているのかを見ていく¹⁰。

インターネット上での問題行動の中で、比較的多く経験されているものは、性的画像などへの接触や、権利のないソフトウェアなどのダウンロードであった。また、インターネット上での未知の他者との性的な内容の会話なども比較的多く経験していることが示された。それに対し、知人などの他者に対する嫌がらせ、攻撃といったハラスメント行為は10%に満たないものが多かった。西村・遠藤 (2016, 2017) における同様の調査をした

結果と比べてみても、この傾向は大きくは変わっていない。多少の増減はあるものの性的情報への接触や権利のないソフトウェアなどのダウンロードは3回の調査で多く、ハラスメント行為は相対的に少ない。本研究においては問題行動の経験についての尋ね方を2件法から5件法に変更したが、同様の傾向が示された。この結果は、この傾向が安定したものである可能性をうかがわせる。

その点でいえば、高校生によるインターネット上での問題行動は、他者に対して直接的・間接的に攻撃や嫌がらせをするような行為よりも、被害者が具体的に想像しにくいような行為が多くなされているということである。ネットいじめなどのような直接的・間接的に被害者がいるようなものについて、匿名性を理由に危険性が強調されることもある。しかしながら、インターネットを利用することで匿名性といったメディアの特徴が人を害するような行動に必ずしも駆り立てるわけではない。ただし、ネットにより得られる（とみなされがちな）匿名性に対して、どのように認識しているかということはハラスメント行為へとつながることも考えられる。例えば、匿名性により特定不可能といった認識が、インターネット上で加害行為を行うことを自分に許容するような認知へとつながることもありうる（藤・吉田, 2012）。

また、本研究で示した結果は、多くはないとはいえ他者に対する攻撃や嫌がらせが一定の割合安定して行われているともいえる。このような行為が繰り返し行われた場合はネットいじめとなるため、より注意が必要である⁹。ネットいじめは従来のいじめと異なるものであるのか否かの議論は続いているが、いじめであることを認識した上で介入をどのように行うのか日本においてもより一層の議論や実証的研究が求められる（Olweus, 2012）。

本研究で取り上げた18の問題行動について、因子分析の結果3つのグループに分けられることを見出した。すでに言及したハラスメント行為、性的情報への接触や他者との会話といった性的な利用、そして未知の他者への個人情報への暴露である。個人情報をどのように扱うのかという点はインターネットがソーシャルメディア化する中で利用者において考えなければならない問題である。

それはプライバシーパラドックスといった状況に私達が置かれているとも表現できる（Barns, 2006）。本研究においては、必ずしも経験率は高くないが、ソーシャルネットワークキングサイトが若者を中心に積極的に利用されている昨今においては検討すべき喫緊の課題である（西村, 2017）。

3回の調査において経験率に比較的大きな変化の見られたものの中で興味深いのは、権利のないソフトウェアなどのダウンロードの行為である。西村・遠藤(2017)においては低下が見られ、2010年1月1日に施行された「著作権法の一部を改正する法律」の影響といった観点から解釈された。しかし、本研究の結果では経験率が戻っている。問題行動の経験の尋ね方を変えたことによる結果の可能性もあるが、経験率が西村・遠藤(2016)と同等となっており、法律の効果が一時的であったことによる変化であるとも考えられる。刑事罰の罰則が盛り込まれるようになって以降どの程度経験されているのかといった点は今後検討していく必要がある。

4.2. インターネット上での問題行動と親密な対人関係との関連について

本研究では親密な対人関係の要因として、親についてはインターネット利用の統制とアタッチメントを取り上げた。横断データに基づく分析結果では、親による統制、アタッチメントともに有意な関連は見られなかった。この結果は予測を支持しなかった。ただし、縦断データに基づく分析では、ハラスメント行為に愛着不安が負の影響、愛着回避が正の影響、接続自由認知が負の影響を示した。未知の他者への個人情報の暴露に対しては、ハラスメント行為と同様の結果であり、さらに統制実践認知が負の影響を示していた。

まず愛着不安であるが、問題行動に正の影響を示すと予測されたものの、結果は負の影響であった。愛着不安は他者との関係に対する自己の不安、自信のなさとして現れるものであり（Griffin & Bartholomew, 1994）、対人関係における不適応的な症状とも関連する（金政, 2007; 金政・大坊, 2003）。インターネットを利用する中でのそのような感情の変化は、本研究で取り上げたような問題行動のように積極的に他者に対する行為と

して現れるのではなく、むしろ内在化される方向で作用し、結果的に他者に対する行為は抑制される方向に影響するとも考えられる。それに対し、愛着回避は親との関係の中での葛藤を強く表しており、Yabarra & Mitchell (2004a, 2004b, 2007) の結果と同様に情緒的な結びつきの不足が問題行動と正の関連を示すという形の結果が得られたのかもしれない。

親の統制については、横断データでは関連が見られなかったが、縦断データの分析では接続自由認知が問題行動全体とハラスメント行為に、統制実践認知がハラスメント行為に負の影響がみられた。この結果は予測を一部支持したと考えられる。親の関わりが問題行動とどのように影響するのかということについては、モニタリングなのか把握なのか、むしろ青少年の側からの自己開示による理解なのかといった議論が続いているが(例えば、Fletcher, Steinberg, & Williams-Wheeler, 2004; Karr, & Stattin, 2000; Stattin, & Karr, 2000)、本研究の結果はハラスメント行為のような直接的に他者を害するような行為については親からの統制を高めることで抑制することを示した。さらに接続自由認知が負の影響を示したが、明確には予測していない結果であった。高校生は親からの自立がある程度行われている発達段階である。そこで、親へのアタッチメントという要因を統制した場合においては、親から自由にインターネットを使うことを支持しているという関係性がむしろ問題行動を抑制するのかもしれない。接続自由認知の影響については、小中学生など他の発達段階との比較といった検討も含めて解釈することが必要である。

友人については感情的側面を取り上げインターネット上の問題行動との関連を検討した。横断的調査においては、信頼・安定がすべてにおいて負の関連、葛藤が性的な利用以外の因子で正の関連を示した。縦断調査の結果では、信頼・安定が未知の他者への個人情報の暴露以外で負の影響を示し、葛藤ではなく不安・懸念が問題行動全体とハラスメント行為について正の影響を示した。友人との間に信頼や安定感を得ることはインターネット上での問題行動の抑制へとつながることが明らかにされた。この結果は予測を支持するものである。一方の、友人との間で不安・懸念や葛藤とい

ったネガティブな感情を抱くことは、横断データと縦断データで関連、影響が異なった。友人ということで自分の思うようなことができないといった葛藤が短期的には問題行動と関連するが、友人関係を意識し受容を望む中で不安に苛まれる不安・懸念という感情は学校での不適応感とつながり、長期的にはハラスメント行為を引き起こすということであるのかもしれない。ただし、ここでの短期、長期という解釈は横断的、縦断的ということと一致するわけではない。また、不安・懸念、そして葛藤といった感情が適応感とどのように関連するのかというメカニズムの詳細を明らかになるまでは、この解釈を結論することは留保しなければならない¹¹。

問題行動の中の未知の他者への個人情報の暴露についてであるが、横断調査の結果では友人への信頼・安定が負の関連、葛藤が正の関連を示しており、この結果は西村(2017)でSNSの効用として束縛感や不快感を認知する人ほど未知の他者と関わる行動が見られるという結果と一致したものである。ただし、縦断調査の結果では、どの親密な対人関係の変数も有意な関連が見られなかった。未知の他者に対し個人情報をさらけ出したり、関わろうとすることは、リスクを伴うものである。そのため、介入などを検討するのであれば、より多様な観点で検討が必要である。例えば、太幡・佐藤(2016)では情報プライバシーの低さや人気希求といった心理的要因がSNS上での個人情報公開や自己表出性に関連することを示している。また、対人関係と関わる要因ということであれば、西村(2017)では、身近な仲間の知覚された規範による影響が関連することが明らかにされており、今後さらなる検討を要するテーマである。

本研究の結果より、一部予測を支持しない、あるいは予測していない関係・影響が見られた部分はあるが、親密な対人関係がインターネット上の問題行動に影響があることが示された。インターネット上の問題行動は青年個人が行うものとしても、その青年を取り巻く親密な他者との関係を把握することで問題行動が予測できる可能性が示されたとも言える。また、その介入を検討する際にも、例えば、親によるインターネット利用の統制の仕方を考えたり、友人関係に問題を抱えてい

る青年に適切なサポートをすることが有効である可能性が示された。具体的な介入方法は今後の課題であるが、考慮すべき点が明確になったということに本研究の意義があると思われる。

4.3. 本研究の限界と今後の課題

本研究においては、西村・遠藤(2016, 2017)の検討と基本的枠組みを同じにししながら、さらに縦断的調査も取り入れることで発展がなされた。ただし、調査対象が調査会社のモニターであり、代表性が大きく毀損されている可能性は否めない。また、調査方法についても、近年オンライン調査に対して取り上げられることの多い回答者にみられる Satisfice (協力者が調査に際して応分の注意資源を割こうとしない回答行動) への対処は本調査においてもなされていない。本研究で得られた知見の妥当性を高めるためにも、調査における精度を上げていく努力が必要である。

本研究では、青年の対人関係とインターネット上の問題行動との関連を検討した。しかしながら、対人関係については青年自身の認識にとどまっておき、対人関係の有り様がとらえきれていない面がある。例えば、親から子への関わりを考える際に、モニタリングや統制をどのように実践しているのかという親自身の評価を取り入れる必要がある。それは友人関係についても同様である。また、友人関係については、特に諸外国の先行研究であるように、逸脱した友人との関係などより特定した形での検討も行うことで、その影響についての知見を広げることができる。さらに、青年を対象に議論をするならば、高校生だけでなく、中学生や大学生、そしてより年少の小学生までも視野に入れ、発達的な変化をみていくことも必要である。

最後に、本研究および西村・遠藤(2016, 2017)ではインターネット上の問題行動の理解に向けた基礎的な知見を提供することを目的とし、多様な問題行動を取り上げ様々な要因との関連を検討してきた。それらはネット上でのハラスメント、あるいはネットいじめ、個人情報扱いやプライバシー、未知の他者との関わり、性的な利用など多様なテーマとなりうるものを含んでいた。今後は行動をより特定した上で、その生起について、心理的、社会的なメカニズムにまで踏み込んだ形で

の詳細な検討が求められる。それらの検討により、インターネット利用、そしてそこでの問題行動についてさらなる理解につながることを期待される。

5. 結論

本研究では、青年の親密な対人関係とインターネット上での問題行動との関連を検討した。親の要因は、情緒的な結びつきとしてのアタッチメント、関わりとしての統制、そして友人については経験する感情的側面を取り上げた。横断データ、縦断データの分析を行った結果、特に縦断データについて親とのアタッチメントや接続の自由・統制実践認知、そして友人関係における信頼・安定、不安・懸念がインターネット上の問題行動に影響することを見出した。特に親の統制や友人関係の影響が示されたことは、青年が示すインターネット上の問題行動への介入についての示唆も得られたと考えられる。

〈注〉

- 1 本研究は日本心理学会第76回大会において発表した内容を再分析し、新たなデータおよびその分析を加えたものである。
- 2 本研究、ならびに西村・遠藤(2016, 2017)におけるインターネット上での問題行動のとりえ方は、西村・遠藤(2016)において詳細な説明がなされているため、ここでは省略する。
- 3 ここでの反社会的傾向とは、教員への反抗・乱暴、授業中に抜け出す、教員や友人へのいじめなどが項目になっている。
- 4 非行傾向行為として喫煙やアルコールの摂取、学校をサボる、万引き・窃盗、出会い系の利用と相手と実際に会う行為などが含まれている。
- 5 欧米など諸外国の研究で「問題行動」とされるものは幅が広い。ここでひとつひとつの研究の詳細には言及しないが、親への反抗や学校をサボる行為、マリファナなどの薬物の使用、公共のものや私物の破壊といったものが対象となることが多い。
- 6 内海(2010)においてはすべて中学生からの回答にもとづいているため、親による統制についての子の認知である。
- 7 問題行動の経験について5件法で頻度を尋ねたが、回答結果は各行動について頻度が少ない方向に分布

の歪みが見られた。そのため、対数変換を行った上で因子分析を実施することも試みたが、変換前のもとのほぼ同様の結果が得られたため、本論文では変数変換しない結果を報告した。

- 8 目的変数には因子得点を用いることも可能であるが、分布の歪みを考慮し、5件法を経験の有無(2件法)に分割した上でのカウントデータを用いた分析を採用することとした。
- 9 ネットいじめをどのように定義するかという議論は続いているが、ここでは一例を示しておく。ネットいじめとは電子的、あるいはデジタルのメディアを通して個人やグループで行われる行動であり、繰り返し敵意のある、攻撃的なメッセージを相手に害や不快感を与えようとする意図をもって伝達する行為のことである(Tokunaga, 2010)。
- 10 インターネット上の問題行動の経験率をどのように評価するかについては、先行研究を参照しながら西村・遠藤(2016)で詳細に論じている。
- 11 例えば、中井(2016)では、中学生の友人関係への信頼(安心感、不信、頼もしさの感覚)と学校適応感との関連を調べる中で、不信が劣等感の無さと負の関連を示すことを明らかにしている。しかし、この友人への不信は、不安や葛藤の要素を含んでいるためそれぞれの違いの評価は難しい。ただし、いじめ加害者は対人関係における自尊感情が低いことが示されており(伊藤, 2017)、友人関係における不安・懸念の感情と近い概念であるとも考えられるため、本論文で示した解釈も一定の妥当性があるとも考えられる。

〈謝辞〉

本研究の実施にあたりご協力いただきました、青山学院大学遠藤健治教授に謝意を表します。なお、本研究の実施にあたり、北陸学院大学2010年度共同研究費の支援を受けた。

〈引用文献〉

- 安藤美華代(2009). 中学生における「ネット上のいじめ」に関連する心理社会的要因の検討 学校保健研究, 51, 77-89.
- Ary, D. V., Duncan, T. E., Duncan, S. C., & Hops, H. (1999). Adolescent problem behavior: the influence of parents and peers. *Behaviour Research & Therapy*, 37(3), 217

-230.

- Ary, D. V., Duncan, T. E., Biglan, A., Metzler, C. W., Noell, J. W., Smolkowski, K. (1999). Development of Adolescent Problem Behavior. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 27(2), 141-50.
- Barns, S. B. (2006) A privacy paradox: Social networking in the United States. *First Monday*, 11. doi:10.5210/fm.v11i9.1394
- 遠藤利彦(2015). 思春期発達の基盤としてのアタッチメント長谷川寿一(監修) 思春期学 (pp.45-64) 東京大学出版会
- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究 47, 180-190.
- Fletcher A. C., Steinberg, L., & Williams-Wheeler, M. (2004). Parental influences on adolescent problem behavior: revisiting Stattin and Kerr. *Child Development*, 75(3), 781-96.
- 藤桂・吉田富二雄(2012). ネットいじめ加害行動に至る心理のプロセス—ネット上での誹謗中傷に対する認知に着目して— 日本心理学会第76回大会大会発表論文集
- Galambos, N. L., Barker, E. T., & Almeida, D. M. (2003). Parents do matter: Trajectories of change in externalizing and internalizing problems in early adolescence. *Child Development*, 74(2), 578-594.
- Griffin, D., & Bartholomew, K. (1994). Models of the self and other: Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 430-445.
- Hinduja, S., & Patchin, J. W. (2008). Cyberbullying: An exploratory analysis of factors related to offending and victimization. *Deviant Behavior*, 29, 129-156.
- 伊藤美奈子(2017). いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究—自尊感情に着目して— 教育心理学研究, 65, 26-36.
- 金政祐司・大坊郁夫(2003). 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, 74, 466-473.
- 金政祐司(2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, 22, 274-284.
- Karr, M., & Stattin, H. (2000). What parents know, how they know it, and several forms of adolescent adjustment:

- further support for a reinterpretation of monitoring. *Developmental Psychology*, *36*, 366-380.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2005). アタッチメント—生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- Laird, R. D., Pettit, G. S., Bates, J. E., & Dodge, K. A. (2003). Parents' monitoring-relevant knowledge and adolescents' delinquent behavior : evidence of correlated developmental changes and reciprocal influences. *Child development*, *74* (3), 752-768.
- 松井豊 (1990). 友人関係の機能 齊藤耕二・菊池章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック (pp.283-296) 川島書店
- 中井大介 (2016). 中学生の友人に対する信頼感と学校適応感との関連 パーソナリティ研究, *25*, 10-25.
- 西村洋一 (2017). LINE のプライバシー設定と利用行動の現状と関連する要因の検討 日本教育工学会論文誌, *40*, 367-377.
- 西村洋一・遠藤健治 (2016). 高校生のインターネット上での問題行動に関連する要因の基礎的検討—インターネット利用動機, パーソナリティ, 行動基準の観点から— 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, *8*, 195-212.
- 西村洋一・遠藤健治 (2017). インターネット上での問題行動と自己制御, 疎外感との関連—高校生のインターネット上での問題行動に関連する要因の基礎的検討 II— 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, *9*, 95-108.
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, *13*, 156-169.
- 小保方晶子・無藤隆 (2007). 出会い系サイトなどを利用している中学生の特徴 : 従来からみられる非行傾向行為との比較 犯罪心理学研究, *45*, 61-73.
- Olweus, D. (2012). Cyberbullying : An overrated phenomenon? *European Journal of Developmental Psychology*, *9*, 520-538.
- Patterson, G. R., DeBaryshe, B. D., & Ramsey, E. (1989). A developmental perspective on antisocial behavior. *American Psychologist*, *44* (2), 329-35.
- Parker, J. S., & Benson, M. J. (2004). Parent-adolescent relations and adolescent functioning : Self-esteem, substance abuse, and delinquency. *Adolescence*, *39*, 519-531.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, *50*, 12-22.
- Steinberg, L., Fletcher, A. & Darling, N. (1994). Parental Monitoring and Peer Influences on Adolescent Substance Use. *Pediatrics*, *93*, 1060-1064.
- Stattin, H., & Karr, M. (2000). Parental monitoring : A reinterpretation. *Child Development*, *71*, 1072-1085.
- 太幡直也・佐藤広英 (2016). SNS 上での自己情報公開を規定する心理的要因 パーソナリティ研究, *25*, 26-34.
- 高木邦子・山本将士・速水敏彦 (2006). 高校生の問題行動の規定因の検討 : 有能感, 教師, 親, 友人関係との関連に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, *53*, 107-120.
- Tokunaga, R. S. (2010). Following you home from school : A critical review and synthesis of research on cyberbullying victimization. *Computers in Human Behavior*, *26*, 277-287.
- 内海しよか (2010). 中学生のネットいじめ, いじめられ体験—親の統制に対する子供の認知, および関係性攻撃との関連— 教育心理学研究, *58*, 12-22.
- Wells, M., & Mitchell, K. (2008). How do high-risk youth use the Internet? Characteristics and implications for prevention. *Child Maltreatment*, *13*, 227-234.
- Wolak, J., Mitchell, K., & Finkelhor, D. (2007). Unwanted and wanted exposure to online pornography in a national sample of youth. *Pediatrics*, *119*, 247-257.
- Ybarra, M. L. & Mitchell, K. J. (2004a). Online aggressor/targets, aggressors, and targets : A comparison of associated youth characteristics. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, *45*, 1308-1316.
- Ybarra, M. L. & Mitchell, K. J. (2004b). Youth engaging in online harassment : Associations with caregiver-child relationship, Internet use, and personal characteristics. *Journal of Adolescence*, *27*, 319-336.
- Ybarra, M. L., & Mitchell, K. J. (2005). Exposure to Internet pornography among children and adolescents : A national survey. *CyberPsychology & Behavior*, *8*, 473-486.
- Ybarra, M. L., & Mitchell, K. J. (2007). Prevalence and frequency of Internet harassment instigation : Implications for Adolescent health. *Journal of Adolescent Health*, *41*, 189-195.